

新型コロナ騒動記

(公社) 日本透析医会

副会長 太田圭洋

昨年2月から新型コロナと付き合うこととなりもう1年5カ月となる。この1年はコロナ対応に明け暮れた1年であった。行政の依頼をうけ、関係する名古屋記念病院が帰国者接触者外来を開設したのが2020年2月。3月1日からは入院患者の受け入れを始めた。ゴールデンウィークには宿泊療養施設に1週間缶詰となりPCR検体を取りまくることとなった。PCR検体採取を早期に恐れなくなったのは、その後を考えてありがたいことであった。

また、ひょんなことから昨年7月から尾身先生が座長を務める政府の新型コロナウイルス感染症対策分科会や厚生労働省の新型コロナウイルス感染症対策アドバイザリーボードの構成員を仰せつかり、専門家の先生方との議論に参加することとなった。その中で地域の透析患者の状況をお伝えすることができたことは幸いであった。直近は専門家有志の一員としてオリパラ開催に伴う提言書に名を連ねることにもなった。

臨床医としては、当初は透析患者がコロナ感染した場合、専門の先生に治療をお願いし回復後を受け持つだけであった。しかし、昨年12月からの第3波で地域の透析患者の入院病床が逼迫したため、関連する新生会第一病院に透析患者対応のコロナ入院病床を5床確保し、必死に仲間とともに勉強し、アビガン、レムデシビル、デカドロン、アクテムラなどなどを駆使しコロナ透析患者の治療にもあたることとなった。コロナ前の状態、コロナ治療、その後の回復期とさまざまな透析コロナ患者を診させていただく貴重な機会となった。全国でも自分の担当する透析患者のコロナ治療を一貫して経験できた先生はそんなに多くないだろう。しかし、その間、多くの患者さんも亡くなった。重症病床の逼迫から、十分な治療を行えず亡くなった患者も発生し、つらい思いをすることとなった。

病院団体での活動としては、コロナの病院経営への影響を調べる緊急経営調査も担当者として実施し、記者会見まで行いテレビに映ることとなった。また、それをもとに各所へ医療機関支援の要望に奔走し、包括支援交付金の確保にも携わることとなった。

気がついてみるとコロナ対応の政策、コロナ治療、コロナ禍における医療機関経営と、透析患者のコロナ医療のすべてに関わることとなっていた。自分以上に一連のコロナ騒動が総合的にわかる人はいないのではないかと思うほど、多方面でコロナに関わらせていただいた。

この一連の騒動の中で強く感じたのは、透析医療の特殊性である。多くの診療所・病院の経営悪化の一番の原因は入院患者、外来患者の減少であった。不要不急の手術・処置の延期や受診が控えられたことが主因であるが、透析医療機関の経営は大きな影響を受けなかった。当たり前のことであるが不要不急の透析患者の受診などあるはずがない。我々は本当に患者の生命に直結する医療を提供しているということを改めて実感することとなった。

また、災害でも特殊な状況に置かれる透析であるが、コロナ感染症でも一般の医療とは一線を画していることも明らかとなった。透析患者のコロナ入院は多くの中核病院が受入れたが、隔離透析を行い入院治療ができる病床はICU、HCUなどの限られたユニットしかない医療機関が多く、透析患者の入院先確保には多くの地域で困難が生じることとなった。あらためて新興感染症対応でも特別な対応が必要な医療であることが判明した。

さらに、コロナに感染した透析患者の生命予後が他の基礎疾患をもつ患者と比較して突出して悪いことも3団体合同調査で判明した。腎不全で全身の血管が傷んでいる透析患者の予後は悪いことが予想されたが、ここまで悪いとは正直思っていなかった。日ごろ接している患者がいかに厳しい状況にあるのか、またその生命を支えている透析医療のすごさを感じる事となった。

もうすぐ東京オリンピックが開催される。第5波の襲来はワクチン接種の懸命な努力にもかかわらず専門家の中ではすでに確定している未来である。なんとかこの大きな波を全国の透析医療関係者は全力で乗り切り患者を守っていただくとともに、今回の一連の経験から学んだ知見をもとに、よりよい透析医療体制を目指していただきたいと思う。